親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌

おやじん Oyazine

Vol.05
2020 03

MHC-05B-1.2
8,900円(税込9,790円)
乾電池は別売り

デザインも性能も
実直な電源ユニットです。

BIRD ELECTRON

乾電池4本から、5V 1.2アンペアの大電流を作りiPhoneやiPadに給電できる電源ユニットです。10年使ってもらいたい製品です。※3年間の動作保証をいたします。保証期間以降も修理を承ります。緊急時にも確実に動作できるよう規格の厳しい産業用電子部品を使用しております。乾電池のもっている力を最大限までふりしぼります。1.2AまでのiPhoneの場合は純正のACアダプターを使用した時と同様の速度で充電します。乾電池が新品であれば様々な種類が使えます。お勧めするのはパナソニックのアルカリ乾電池ですがアルカリ・ニッケル水素電池の他に特殊なエボルタや充電タイプのエネループが使えます。※3年間無償保証(配送費のみお客様負担)3年以降はパーツ入手な可能な期間は(10年目安)実費修理を行います。

詳しくは→http://shop.bird-electron.co.jp/

◆編集後記◆

「適当でいい加減な雑誌」と謳ってはいるものの、発行の間隔があまりにも空いてしまいました。今号の発行のために取材や原稿依頼をしましたが、それから数年が経ってしまいました。今回やっと発行するための時間や気持ちの余裕が生まれて形にすることが出来ました。取材させていただいたFugeeの藤井さんをはじめ執筆者の方々に大変ご迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。また、藤井さんの取材は2017年の夏、執筆者の方に原稿を依頼したのは2018年の5月だったと思います。それゆえに掲載内容が現在の状況と異なることがある場合は、原稿を最終確認していただき、必要があれば修正の上掲載しました。

ちょうど今号の入稿直前に、03号で斎藤陽さん執筆の『カプリチョーザの本多さんのこと』をきっかけに、斎藤さんと一緒に本多さんの奥様にお会いしました。本多さん亡き後、店を引き継がれて社長として現在のカプリチョーザを築いた方です。斎藤さんが文章と一緒にぜひ本多さんのポートレイト写真を載せたいという希望で、私がカプリチョーザに写真をお借りしたい旨をメールしました。その時に斎藤さんの文章を読まれた奥様からぜひ写真をお使いください、さらに斎藤さんにも直接お会いしたいという返信をいただきました。当時斎藤さんがシンガポール勤務だったため、なかなか実現しませんでしたが、名古屋へ転勤になったことで、今回やっと実現しました。お会いした場所は勿論あの渋谷のカプリチョーザ。店と共に40年以上続いている定番メニューの大盛りの「トマトとニンニクのスパゲティ」をいただきながら、奥様と斎藤さんの本多さんならではのエピソードで話は盛り上がりました。

この雑誌をきっかけに、こんな人との繋がりが生まれることは、編集長の私としてもうれしい限りです。

実は今回こんなにも発行を延ばしてしまい関係している方々に迷惑をかけてしまったので編集長失格、今号で終わりにしようかと思っていました。しかしそれでもなんとか続けたいという思いもあります。次号の発行は現在未定ですが、続けられる方法を模索したいと思っております。(島)

写真とデザインの町工場　島製作所

OYAzineを制作している島製作所は、写真とデザインを使って下町の町工場のように手作りでグラフィックの制作物を作る小さな会社です。弊社にご依頼されるアイテムは原則として問いません。名刺・年賀状からDM・パンフレット・WEBデザインまで、お客様にとってほんとうに必要な写真やデザインそしてコピーを「正直」と「誠実」を旨に提供いたします。　ライブフライヤーキービジュアル▶

★お気軽にご相談ください。メール→shima@shima-f.com
★会社案内のpdfをメールにてお送りします。
★Facebook→島製作所で検索（HPは只今リニューアル中）

企画・編集・デザイン・撮影：島製作所　発行：島 隆志　記事中のクレジットがない写真：島 隆志
ご意見・ご感想を是非お送りください。●mail:oyazine@shima-f.com　●Facebook:OYAzine で検索
(有)島製作所　OYAzine編集室　〒167-0022　東京都杉並区下井草4-21-11　●http://www.shima-f.com

過激な寡黙

鞄職人・藤井幸弘さん

最初に会ったのは、まだ藤井さんのお店「Fugee」が渋谷にあった頃だった。渋谷とは言ってもちょっと奥まった静かな場所で、狭い道に面した小さな目立たないお店だった。知り合いのミュージシャンが島さんが好きそうな鞄職人がいるから紹介するよということで、どんな人かも知らないままに軽い気持ちで会いに行った。

その店に入ると派手さはないが高級そうな鞄が静かに並んでいた。そして当の藤井さんはいわゆる職人らしからぬ知的で物腰の柔らかな人で、初対面にもかかわらず鞄について気さくに話してくれた。話を聞くと「高級そうな鞄」は実はフルオーダーの1点物の男性用の鞄だった。藤井さんは静かにそして熱く鞄の作り方を語ってくれたが、執拗とも思える緻密な鞄作りの内容に驚くと言うより呆れるくらいだった。当然1点作るのに何ヶ月もかかるらしい。一体価格はどれくらいなのか。鞄の仕様にも依るのだろうが、外車1台は買えるくらいのものもあるとのこと。それでも手間を考えると決して効率のいい仕事ではないという。

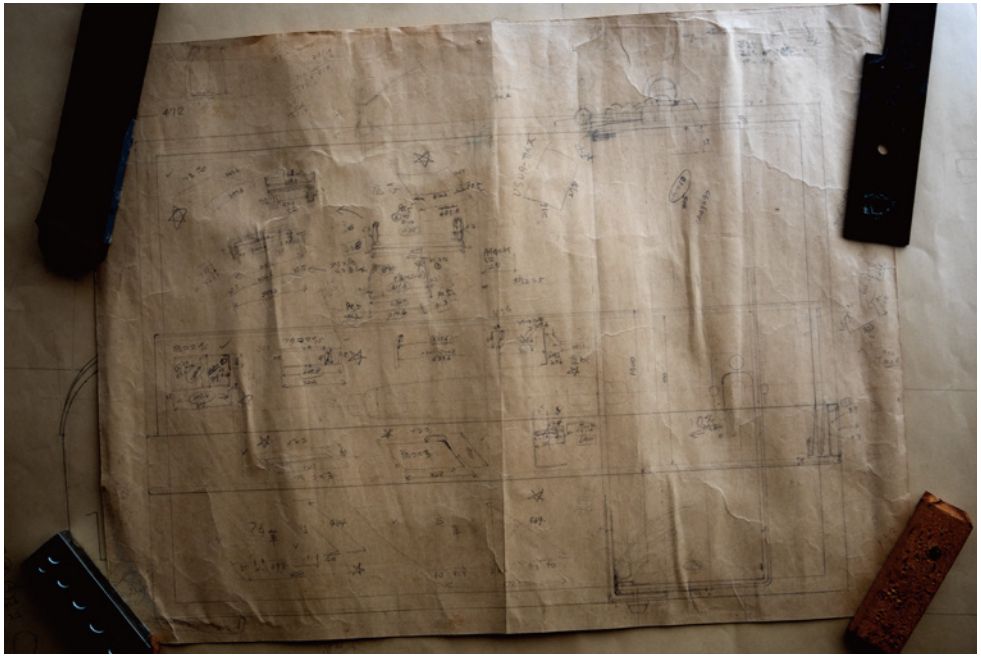
このように書くと藤井さんはいわゆる職人気質の世界で長い修業を経てきた人のように思えるが、今回池袋にある藤井さんのアトリエ兼お店に伺って取材させていただき、それは僕の勝手な思い込みであることを思い知らされた。

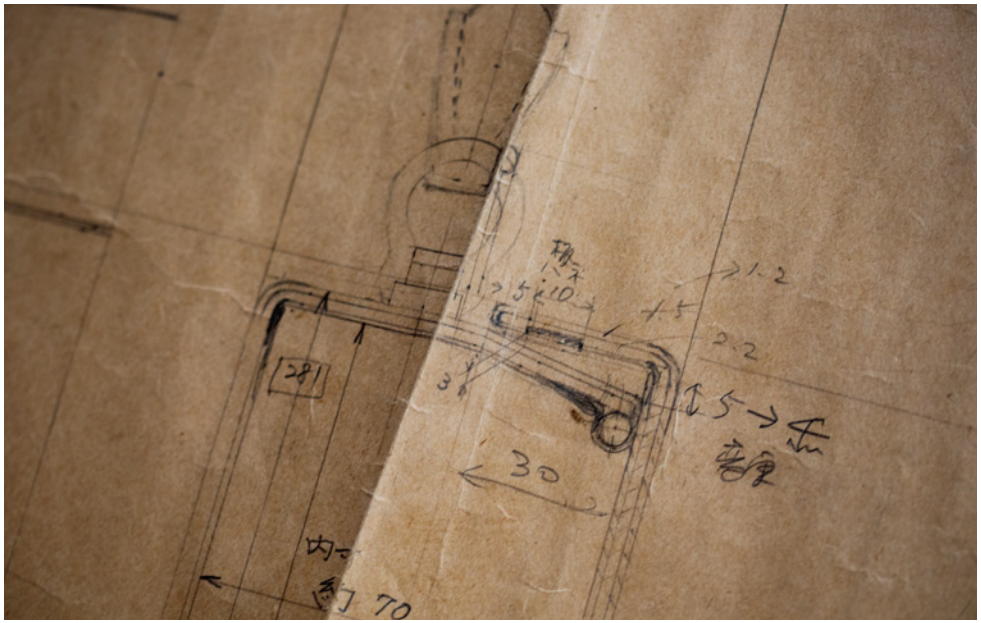
取材を始めると藤井さんは言った。「意外かもしれませんが、僕は伝統とか古典とかが嫌いなんです」僕の職人のイメージがあっという間に崩れた。職人＝保守・伝統・古典ではないのか。昔から継承されてきた技術や表現方法は否定しないが、そこに安住してしまうと閉鎖的になり、新しいことを生み出せなくなってしまうからだと言う。これは藤井さんの本質であると思った。そしてエンジニア出身ということにも関係しているように思えた。

藤井さんは大学の工学部の機械工学科を卒業している。この学科を出ると、多くは企業で様々な機械の設計をするエンジニアになる。藤井さんもある自動車メーカーの最終組立ラインで使う機械の設計を主にやっていたエンジニアだった。仕事自体は面白かったらしいが、メーカーの下請けという会社ゆえにその未来に希望が持てず、6年半で退社する。

それから藤井さんの兄の仕事を手伝うことになるが、その兄の仕事はグラフィックデザイナー。しかも何か面白いことをやらないと気がすまないタイプだった。会社をやめた藤井さんを彼は自分のやりたいことに引きずりこむ。それは当時まだめずらしかったTシャツにプリントする仕事だった。藤井さんはまず営業として、東京中の大学のサークルをサンプルを持って片っ端からかけずり回って営業をした。そしてその仕事は順調に儲かり始める。今ではデジタル技術を使って様々なプリントが可能だが、当時はまだシルク印刷で手作業でのプリントだった。それでも東京ではまだ競争相手が少なかったので仕事はさらに増え続けた。

そんな時に、たまたま兄の奥さんから銀花（文化出版局）という雑誌に掲載されていた、ある作家の革の鞄の写真を見せられた。藤井さんはなぜかその鞄に一目惚れする。そしてとにかく同じものを作ってみたいと無性に思ったらしい。写真は箪笥と一緒に写っていたので、箪笥の常識的なサイズを想定し、そこから鞄の大きさを割り出した。さらに写真を参考にして元エンジニアらしく鞄の設計図（三面図）を描き起こし、そこからは試行錯誤の独学で鞄





藤井さんの鞄作りの独自性を一番表している設計図面。通常の鞄作りの工程ではデザイナーのスケッチのみで設計図はない。藤井さんは具体的な製作に入る前に必ず1/1の設計図を描く。しかもそれはアナログ感溢れる手描きである。設計図とは設計した人がその詳細を実際に製作する人に伝えるためのものだが、藤井さんの場合はデザイン・設計・製作をひとりでやるのでこの設計図は藤井さんにしかわからない細かなメモがや、修正がたくさん書かれていて、設計図はさしずめ鞄を作る過程での藤井さんのドキュメントにもなっている。

を作ってしまう。実はこの生まれて初めて作った鞄の作り方が、後の藤井さんの鞄作りの基本のスタイルになっている。勿論作った鞄は素人が作った技術的には未熟な手縫いの鞄ではあったが、今見たとしても、そこそこのレベルだったらしい。その頃お兄さんのTシャツは最高潮に儲かっていたのだが、藤井さんの鞄作りへの熱はもう冷ましようがなくなっていた。兄に鞄をやりたいからTシャツの仕事をやめたいと切り出し、結局喧嘩するようにしてやめる。

早速初めて作った鞄を持って、無謀にも当時雑誌などで人気があった鞄メーカーの社長に会いに行った。そして鞄を見せ、鞄職人として雇ってもらいたいとお願いした。そんな勢いだけで実務経験が無いにもかかわらず、藤井さんの熱意が伝わったのか、元職人だった社長は採用してくれた。しかし、当然だがすぐには鞄を作らせてもらえなかった。まずは営業として、ダンボール箱を抱えて百貨店通いが始まった。しばらく営業の仕事が続いたが、しかし入社した本来の目的は鞄を作ることである。社長から革の手縫の技術を教えてもらい、早く鞄を作りたくて仕方がなかった。社長に直訴しようかと思った矢先、社長もそれを察したのか、そろそろ作って見るかと言ってくれた。それから二人は毎日、別室で鞄作りを始める。

その会社には全国への発送業務があり、それを担当するパートの老人達がいた。ある日、社長と藤井さんが作業をしていると、その中のひとりの老人が二人の作業を見ていて、ちょっと革の一部を貸してもらえないかと言った。老人はそれを一旦家に持ち帰って革の小物を仕上げてきた。社長はその仕上り具合を見てびっくりする。元職人である社長にはその老人がすごい職人だと一目見てわかったのだ。聞けばその老人は、その世界では革の小物を作る名人と言われるほどの人だったのである。少年時代から丁稚として職人の世界に入り、長い期間に渡り技術を磨き上げた職人の鏡のような人だった。長い職人生活の後、奥さんの勧めで引退したが、体はまだ動いたのでたまたまその会社に発送業務のパートとして来ていたのだった。まるでテレビドラマのような話である。

藤井さんは初めて本物の職人と出会った。そしてしばらくの間、その老人と一緒に革の小物の製作をしたが、彼からは技術的なことよりも、ただひとつ、とても大事なことを学んだと言う。それはいたってシンプルなことだった。

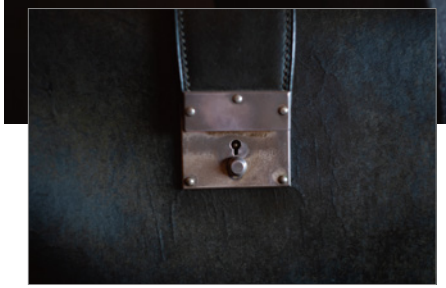
「職人は絶対に手を抜いたらだめだ。もし一度でもやってしまったら這い上がれなくなる」

この一言が今の藤井さんの中でも絶対的な存在として生きている。現在鞄の世界は分業化が進み、職人はデザイナーの下請けの存在になってしまった。藤井さんはデザイナーをはっきりと嫌いだと言い切る。その理由は大量販売のために経済効率を優先させた結果、職人に職人ならではの鞄の作り方をさせなくなってしまったからである。藤井さんから見るデザイナーは鞄を作る人ではなく、売れる商品を作るための商売人なのである。

その後その会社から独立すると、あのTシャツの兄の発案で、ものを作る仲間たちと一緒に東京郊外の国立でショップをやることになった。そこでさらに独学で鞄の製作に打ち込んだ。その後渋谷に前述の店を出すことになる。しかし、藤井さんの鞄の作り方の基本は最初に作った鞄と同じである。そして職人としての作り込みはさらにレベルアップしていく。まず顧客のわがままなオーダーを聞く。それに基づいてイメージを描き、それを1／1の設計図に落とし込む。通常の鞄を作る行程に、設計図を引くという行程はない。藤井さん独自の行程である。その設計図に基づいて、独学で覚えた技術で試作を繰り返し、1点物

Fugee ホームページ https://fugee.jp/
Facebook : Fugee 藤井鞄店で検索

藤井さんの友人から依頼されて作った、ワインボトルとグラスを収納してどこでもワインが飲めるというちょっと粋で贅沢な鞄。外観は極めてシンプルだが、その中は凝った作りになっている。鞄下部の丸い取手を回すと引き出し部分の取手が飛び出し、引き出しを開けると中にはコースターが収納されているという仕様。これは藤井さんならではのアイデア。この部分の金属パーツも一からオリジナルで製作している。



昔作ったという鞄。小さいが作りはしっかりしていてその大きさとは裏腹に重厚感すら漂う。金属部分にメッキ処理は使わない。その理由は使う人によって金属が様々な表情に変化するのがいいと言う。金属部分は既製品をそのまま使うこともしない。さらにオリジナルで一から製作することもあるという。

のかなり特殊とも思える鞄を「わがまま」に作り続けた。

最近「職人の拘り」とか「もの作り」とかの言葉はよく耳にする。しかし、実際のもの作りの現場は、藤井さんの話を聞くと、生やさしい世界ではなかった。藤井さんの場合、極論すれば資本主義との戦いとも言えるかもしれない。藤井さんの鞄が、他の鞄と決定的に異なるは経済効率に背を向けて、職人としてのわがままを貫き通していることである。職人を目指す若者や海外からも藤井さんの仕事に興味を持ってアトリエを訪れる人たちは結構いるらしい。しかし、藤井さんと同じレベルの人には出会わないと言う。

今回取材して思ったのは、藤井さんを「職人」と言っていいのだろうか、ということだった。たぶん藤井さんは「こだわりの職人」と言われるのは嫌うだろう。その言葉にはたっぷりと手垢がついてしまい、閉ざされた安住の世界の匂いがするからだ。勿論その鞄を作る技術は「職人」として非常に高度なものだと思う。しかし、彼はそこにはずっと居続けることはしない。そもそも1点ものフルオーダーという世界は依頼する人間のわがままに応えなくてはならないから、同じことを繰り返すことが出来ない。それは常に危険で孤高な世界である。藤井さんの作る鞄は寡黙なデザインのものが多いが、その本質は実はとても過激なのである。（島）

ラストダンスは私に
Save the Last Dance for Me

7～8年前、仕事も私生活もどん底だった頃、このOYAzine主宰の島さんが「最近面白いと思ってるミュージシャンがいて、今度私の事務所でライヴをやるので来ませんか?」と誘って下さった。「古我地」という沖縄民謡を主体にそれ以外の歌も彼流のスタイルで歌う沖縄出身の歌手。「ラストダンスは私に」もしばしば歌われる曲のひとつだった。

彼はこの歌を〝越路吹雪〟の日本語の歌として知ったそうだ。女性が男性に向けて語りかける歌として。でもこの曲は1950～60年代に活躍したアメリカの黒人男性コーラスグループ「ザ・ドリフターズ」がオリジナル。古我地はライヴで若い聴衆に向けて「多くの日本人はこれは女性が男性に向けて歌っている曲と思っているけれど、もともとは男性が女性に向けて歌っている曲なんです」と話していた。私自身もこの曲との出会いは古我地と同じだった。私がまだ幼稚園の頃、日曜日の朝になると父が越路吹雪のレコードをかけていた。その中に「ラストダンスは私に」も含まれていた。音楽が好きという自覚もない子どもの頃に、私の記憶に越路吹雪が歌うこの曲は深く刻み込まれた。だからこれは女性が男性に向けて歌っている歌であり日本の曲であると思っていた。

高校生くらいの頃〝シャネルズ〟が爆発的人気となり、そのルーツたるドゥワップ・ミュージックが脚光を浴び、50年代60年代のアメリカのドゥワップのレコードが数多く再発された。いっぱしの洋楽好きに育っていた私はそれを何枚も買い込んだ。その中にザ・ドリフターズの〝Save The Last Dance For Me〟が含まれていて、その時初めてそれが越路吹雪の「ラストダンスは私に」のオリジナルであることを知ったのだった。その歌が男性が女性に語りかけるアメリカの歌であることを知った後も、自分のパートナーをパーティー会場で自由に振舞わせる男の(あるいは女の)余裕を歌っているのだと私は思っていた。

ところがある日、音楽好きの先輩と酒を酌み交わしていた時、この歌の本当の意味は違う、と聞かされた。曰く「なんで男がパーティーで自分のパートナーが他の男と踊るところを見ていなければならないか、おかしいと思わない?普通そういう状況だったら、男も見ているだけでなく他の女の子と踊るでしょう?それはね、この曲が戦争で負傷して身体が不自由になって帰ってきた軍人の歌だからなんだよ。自分は身体が不自由でパーティーで踊ることができないけれど、自分のパートナーにはせめて誰かと踊って楽しんで欲しいという気持ち。そして自分の愛するパートナーが他の男と踊ることを見ているしかない複雑な気持ち。寂しさと愛情が折り重なっている曲なんだよ」

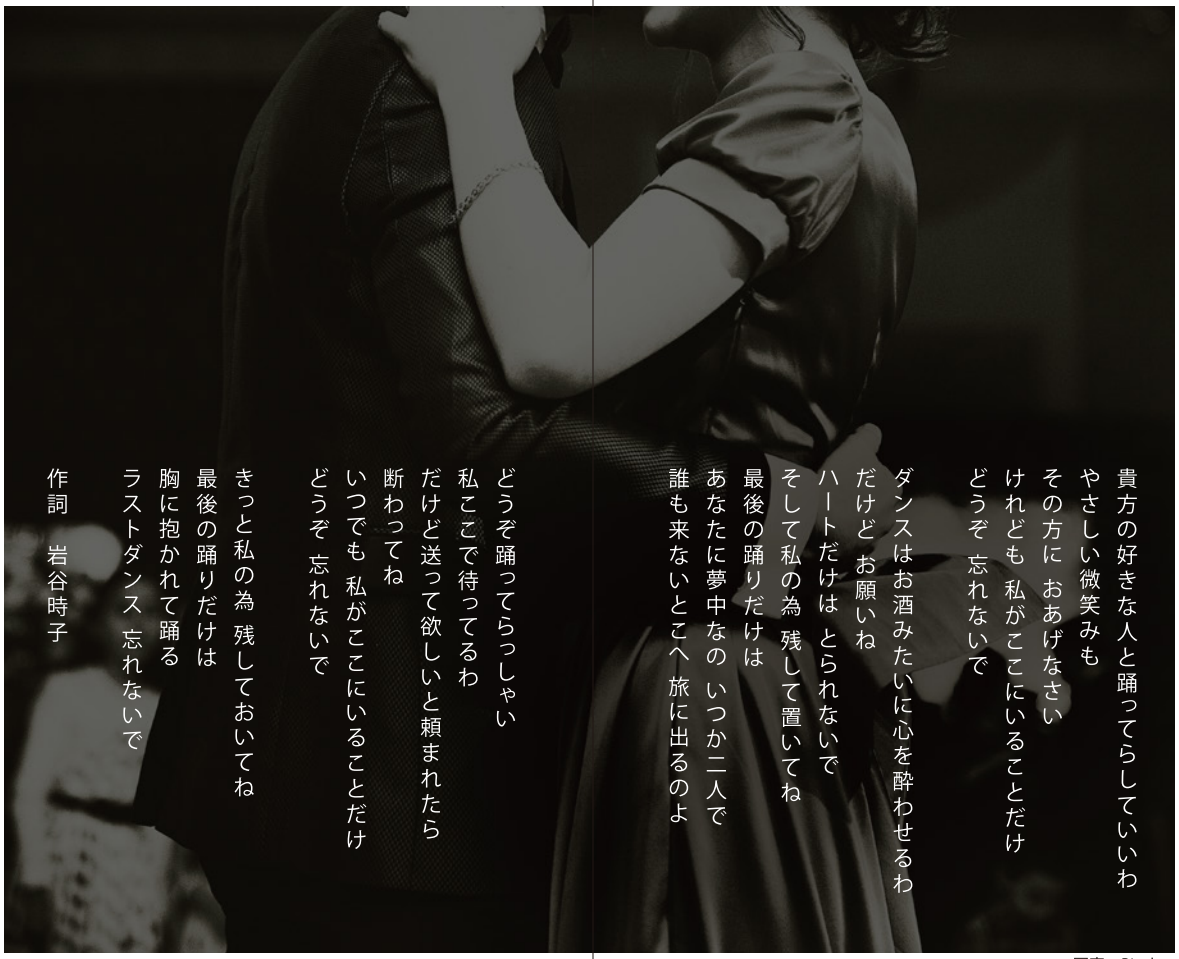
後日、古我地のライヴの後に、古我地にこの話を知ってるか?と尋ねてみた。古我地は初めて知ったと言った。

しばらくして古我地から、自分の〝ラストダンスを私に〟の映像をFacebookにアップしたからあの話をそこに書いて欲しい、とのメッセージを受け取った。その時私は、その先輩を疑ったわけではないけれど、その曲のことをあらためて調べてみた。

分かったことは、この曲を作詞作曲したドック・ポマス(Doc Pomus)は、小児麻痺のため下半身が不自由で、生涯車椅子と松葉杖を必要とした人物だったということ。彼がこの曲を作った時に〝戦争で負傷した帰還兵〟を想定したのかどうかは分らなかったけれど、作者の境遇を知っただけで、この歌の主人公の気持ちは先輩が言っていた通りなのだと分かった。

この曲を初めて知ってから40年以上もたって、この歌の本当の意味を私は知った。私はこの話を、この曲を私に教えてくれた父にいつか話したい、と思った。しかし、そんなことはいつしか忘れてしまい、父は一昨年他界した。私は父の最期に立ち会うことが出来なかった。父が息を引き取った翌日のベッドの横には、ポータブルCDプレイヤーと越路吹雪のCDが残されていた。

ふと思えば、この話を伝えたあの日以来、私は古我地の歌を聴いていない。　(斎藤 陽)



写真：Pixabay

貴方の好きな人と踊ってらしていいわ
やさしい微笑みも
その方に おあげなさい
けれども 私がここにいることだけ
どうぞ 忘れないで
ダンスはお酒みたいに心を酔わせるわ
だけど お願いね
ハートだけは とられないで
そして私の為 残して置いてね
最後の踊りだけは
あなたに夢中なの いつか二人で
誰も来ないとこへ 旅に出るのよ

どうぞ踊ってらっしゃい
私ここで待ってるわ
だけど送って欲しいと頼まれたら
断わってね
いつでも 私がここにいることだけ
どうぞ 忘れないで
きっと私の為 残しておいてね
最後の踊りだけは
胸に抱かれて踊る
ラストダンス 忘れないで

作詞　岩谷時子

筆者プロフィール(saito yo)
昭和38年、東京生まれ。高校大学時代を通じ雑誌ロッキング・オンに執筆。卒業後自動車会社勤務、零細運送会社社長を経て、現在商社勤務。

バーテンダーが語らないウイスキーのこと（ウイスキーの味）

ウイスキー・バーのバーテンダーを始めて何年かたつのだが、先日、バー・ラジオのSさんに、「全然バーテンダーに見えない。」と言われた。なんでも、バーテンダーには特有の雰囲気が漂うらしいのだが、私には全く、それが感じられないとのこと。会社員をしていた頃も。そこの社員に見えないとよく言われていたことを思い出す。この年になり、どうやら自分が何者にも、なりきれない類であることが薄々わかってきた。元来、パラダイムに異を唱えるのが好きなのだ、大勢に反抗すると、自分が少しだけ偉くなった気分になり悦に入ってしまう。ということで、本流のバーテンダーが語らないウイスキーの『味』について書いてみようと思う。

ウイスキーの味は文脈だ。ウイスキーだけでなく、酒の味というものは、そのものの本来の味が占める割合は、せいぜいコーヒーに入れる砂糖ぐらいなのかもしれない。でなければ、美味しくもないカクテルを出す老舗のホテルのバーが、連日、客で溢れていることの説明がつかない。そう、味というものは、本来の味覚や嗅覚だけでなく、いくつかの情報を脳が構成して感じるものだ。例えるなら、脳の中に一つの本棚があり、そこにある数種の本と照らし合わせて認識するもの。人によって本棚の大きさは変わらないが、並んでいる本の種類は異なると思う。私の本棚に並んでいる本のジャンルは『感覚』、『金』、『希少性』、『歴史』、『デザイン』、『色』、『温度』、『空間』、『人』だ。本来の味を感じる味覚や嗅覚にあたる『感覚』以外のものについて見ていきたい。

まず、『金』。私は拝金主義者的なところがあるので、価格が高いと聞くだけで美味しく感じてしまう。ある知り合いはホストに貢げば貢ぐほど、彼女にとって、彼が大きな存在になり溺れていった。自分が掛けた対価を否定するのは難しい。

『希少性』。酒屋の棚を見れば、「限定」と記載されたラベルのウイスキーが幾つも並んでいる。限定ものと言えば売れるからだ。美しい女性に、「私だけよね…」、「こんなことしてあげるのは、あなただけよ…」と言われると頬が緩んでしまう。

『歴史』。歴史や伝統という物語も私を惑わす。長く続いたことと、美味しいということに因果関係があるように洗脳されてしまっている。多くのスコッチのボトルに、それ程関係のない王族や貴族の紋章がデザインされているのは、伝統があるように見せかけると売れるからだ。実際に、長く続けるためには商売上手であることのほうがはるかに重要だ。

『デザイン』。ボトルやグラスのデザインもウイスキーの味を左右する。ウイスキーではないのだが、主要なラグジュアリー・ブランデーはボトルの製作コストが中身の数倍する。私も、そのボトルを作ったフランスのメーカのグラスでウイスキーを飲むのが好きだ。繊細に唇に触れ、その重厚感は注がれたウイスキーの品位まで向上させたような気がする。

『色』の影響も大きい。ウイスキーはブランドによって濃淡があるのだが、大抵の場合、色が濃いだけで、アルコール度数が高くなったと錯覚してしまう。無味の着色料でピンク色にした白ワインと、元の白ワインをソムリエたちに味比べをしてもらう実験をしたところ、ほとんどのソムリエはピンクに着色されたほうを、より甘いと評価したそうだ。

『温度』はわかりやすい。安い白ワインを買ってきて常温で飲んでみれば、温度の重要性がわる。現在のカクテルが生まれたのは、約100年前で、粗悪な密造酒に砂糖水を混ぜ、その頃、流通し始めた氷で冷やすことにより、普及していった。

『空間』。私がまだ学生だった頃、漫画本が山積みされている、どこの街にも一軒はありそうな喫茶店で告白したことがある。彼女はいらだち、話を遮ると、東急文化会館の上階にあったプラネタリウムに私を連れていき、星を見ながら、告白を再開するように促した。空間は恋も甘くさせる。非日常を感じさせるバーは酒を美味しく感じさたりもする。

『人』の影響も侮れない。件のバーがある老舗のホテルで、ディナーショーをプロデュースしたことがあるのだが、予算の都合で美味しいとは言えない安ワインを持ち込んだ。当時、メディアによく登場していた髭の料理長が、ディナーの前に、そのワインを手に取り、今日の料理の為に自ら現地で買い付けてきた至極のワインであると説明してくれた。ゲストたちはワインを堪能し笑みさえこぼした。権威は、味を変えられるのだ。一緒に飲む人によっても味は変わる。恋人が側にいれば、なんの変哲もない木漏れ日も、美しく光り輝いて見える。

綴ってきた、これらの要素を脳が組み合わせて、私に味を感じさせる。そう、ウイスキーの味は、いくつかの錯覚で構成されている。錯覚だからこそ、ウイスキーは千変万化し、魅力的なのだ。私とは違い、自分の感覚（味覚や嗅覚）だけで、ウイスキーを味わうのだから、他の要素は関係ないという人もいるだろう。もし、貴女が、そういう人なら幸せだ。教えてもらえれば、恋人と同じ圧力・速度・振動で貴女に触れよう、きっと貴女は大好きな人に触られるのと同じ刺激を感じられるのだから。

（与良 素道）

撮影：筆者

筆者プロフィール（yora motomichi）
昭和40年。東京生まれ。株式会社電通を退社後、2015年より
BAR ARKHAMを開業。
https://www.arkham.company/

朽ち写し ⑥

本誌02号で紹介した元やくざの親分で、その後堅気になり、ヌメ革に焼き絵を描く画家に転身した元心さんの背中に彫られた絵。この絵が他と異なるのは、キャンバスが生身の人間の肌ということである。そして描き直しができない一回限りの絵でもある。彫られた途端に、その人間と共に生きることになる。しかし、生身の人間の肌に描かれた故に、その絵もまた歳を重ねて朽ちていく。描かれた当初の血気や色彩は褪せてはいくが、逆に人生の深みを滲ませる。そしてこの絵は元心さんと共に彼岸に行くのだ。

彼岸に行く絵。

女優 伊澤恵美子と行く 昭和な散歩

その六 佐渡島①

伊澤さんが関わるイベントの撮影で数年前に佐渡島に行った。その時に仕事の空き時間を利用して彼女を撮影しながら佐渡を巡ってみた。

佐渡島は新潟港からジェットホイルで1時間余り（通常のフェリーで2時間半）で着く。沖縄に次ぐ日本で2番目に大きい島である。

初めての佐渡島で伊澤さんが用意してくれた宿は、両津港のそばにある「金沢屋旅館」というかなり古い旅館だった。玄関には「金沢楼」というそれらしい木彫りのりっぱな看板が掲げられていた。元遊郭だったらしい。とりあえず荷物を置こうと思ったが声をかけても誰もいない。勝手にトイレだけ借りて仕方なくイベント会場へ向かう。夕方になって、仕事が終わるのが夜遅くなると電話をしたら宿の親爺は「風呂を沸かして、部屋を暖めておきます」と言う。寒い夜中に宿に着くと部屋は石油ストーブの柔らかな暖かさに満たされていた。タイル張りのレトロな風呂もちょうどよい湯加減。旅館の中をあらためて見ると、かなり古いのだが（後で聞いたら築100年以上）適度に朽ちていて気取ったところがないのも気に入った。たぶん宿の親爺もそういう人間だろうと思った。

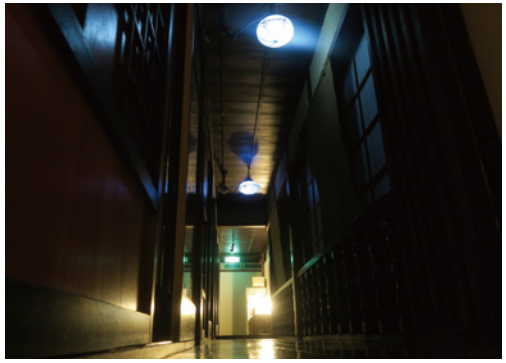
▲雨に濡れた中庭には朽ちつつある風情が漂う。

▲外観は館内ほどの古さは感じさせないが、看板のやれ具合がいい。

次の日の朝、宿を出ようと思ったらまた誰もいない。どうやら客は僕ひとりのようだった。玄関のそばにある部屋の石油ストーブは点いたままだ。ストーブは気になったがそのまま宿を出て、レンタカーを借りて伊澤さんと撮影に出かけた。せっかくだからこの旅館でも伊澤さんを撮ってみたいと思い、夕方旅館に戻って初めて宿の親爺に会うことになった。案の定、親爺は宿の雰囲気同様気のいい人物であった。旅館で撮影していいかと聞くと、だったらいい部屋があると言って広い部屋に案内してくれた。しかも寝る部屋もその部屋に移動していいと言う。その部屋は二部屋になっていて、広い部屋には遊郭らしい大きな金屏風があった。きっとそれなりに由緒あるものだろうとは思うが、この旅館同様適度に朽ちていてそれがいい味となっていた。

次の日の朝起きると、「誰もいなので勝手に帰ってください」という内容の手書きのメモが置いてあった。（宿代は前の晩に支払い済み）シーズンオフならではのゆるさが心地よかったが、帰京してからネットで金沢屋旅館を調べてみたら、結構有名な旅館だった。しかし、宿の親爺はそんなことを気にしている風もなく、これからもゆるゆると旅館経営を続けていくのだろうと思った。（島）

▲古い旅館ならではのしっとりとした朝の光。



▲夜中の廊下は元遊郭ゆえにちょっと怖い。

▲館内には結構な数の古物が飾ってある。

▲大正時代にアメリカ人が支払ったというロシア紙幣。

伊澤恵美子プロフィール
9歳から舞台に上がり、モデル・女優として活動。映画「子宮に沈める」主演、日タイ国際共同製作映画「アリエル王子と監視人」主演他ドキュメンタリー映画「ちいさな、あかり」企画など多岐に渡り活動中。熊本市PR特命大使。
FB : izawaemiko Insta : emikoizawa

インスタントラーメン・ア・ゴー・ゴー

instant noodle・a・go・go

日清のチキンラーメンが発売されたのが1958年。国鉄の初乗り10円の時代に1袋35円だったということは、今の価値に直すと、560円くらい。そう、意外に忘れられがちだが、インスタントラーメンは、決して安いものではなかったのだ。それは、日清の「出前一丁」、東洋水産の「マルちゃんの屋台ラーメン」、エースコックの「ワンタンメン」などの60年代後半に発売された、スープと麺が分かれたタイプにしても同じだ。その当時、どちらかというと裕福だった我が家でも、夕食のメインとして出されていたのを覚えている。もっとも、それは父親が大のインスタントラーメン好きだったという事情もあるのだけれど、しかし、当たり前のようにちゃんぽんや皿うどんが夕食のメインになっていた我が家的には、特に何の疑問もなく、祖父母もうまそうに食べていた。

1963年生まれの私にとって、店のラーメンよりも先にインスタントラーメンを食べていたわけで、そう考えると、福岡の天神の隣町と言っていい大名で育った私なのに、豚骨ラーメンよりも醤油ラーメンの方を先に食べていたのだから、我ながらビックリする。とはいえ、私以降の世代の子供は、案外そういう人が多いのではないだろうか。私も、今でこそ、ラーメンと言えば豚骨ラーメンのことであり、しかし、東京ではおいしい豚骨ラーメンよりもおいしい醤油ラーメンの方が多いから醤油ラーメンを食べるとか、分かったような事を言っているが、ルーツ的には醤油ラーメンというか、チキンラーメンと出前一丁で育っているのだ。更に、サッポロ一番みそラーメン、サッポロ一番しょうゆラーメンも大好きだった。もっともそれは、当時、おいしい豚骨スープのインスタントラーメンがなかったからだし、最愛のインスタントラーメンは豚骨に近い味のマルちゃんの屋台ラーメンだったのも確かで、豚骨ラーメン愛は決して偽りではなかったのだけれど、高校時代、学校から自転車で5分くらいのところに、100円でインスタントラーメンを作ってくれるたこ焼き屋があった。私は毎日、昼休みになると自転車を飛ばして店に駆け込み、「今日はうまかっちゃんで！」「みそトコトン、ありますか？」「博多んもんは横道もん、青竹割ってへこにかく。ばってんラーメン、入っとう？」「くおーか、ば」と、インスタントラーメンを食べる日々を送っていた。親に300円の昼食代をもらい、1日200円浮かす。土曜も部活動で昼食が必要だったから、1週間で1200円のお小遣いになる。学食のきつねうどんは200円で、それだと1週間で600円だから、雨が降っていても自転車でたこ焼き屋に向かうのだった。そうして2週間溜めると、LPレコードが1枚買える。3週間溜めれば2枚組が買える。そうやって、ELP、YES、キングクリムゾン、クラフトワーク、ラ・デュッセルドルフ、スパークスといったプログレッシブロックや、ストラングラーズ、ワイヤー、ウルトラヴォックス、XTCなどのニューウェーヴ、ポストパンクのレコードを買い漁っていた。驚くべきは、高校3年間、ほぼ毎日、昼食はインスタントラーメンを食べていたこと。インスタントラーメン好きの両親に育てられた私は、日曜の昼食も、夏場の冷やソーメン以外では、ほとんどインスタントラーメンだったわけで、更に言えば、中学時代の休日の昼食も毎食インスタントラーメンだったのだ。改めて振り返るとビックリだが、しかし、その頃は、インスタントラーメンという食べ物は、そういうものだったりしたのだ。「ちび六ラーメン」なんていう、食べる麺の量を調整できる商品が売れていたのは、そのくらい、インスタントラーメンが日常的な食べ物だったからだろう。インスタントラーメンの作り方に大きな変化が表れたのも、その頃だったと記憶する。お湯を沸かし、麺をゆで、粉末スープを入れて仕上げるというスタイルから、スープはあらかじめどんぶりの中でお湯で溶いて作っておき、そこにゆでた麺をざるで水を切って入れるというスタイルへと変化したのだ。その方が明らかに美味しかった。味がスッキリした。その作り方の手順だけ見れば、それはラーメン専門店の方法と同じなのだ。しかし、その製法によってザルが必須になったインスタントラーメンは、洗い物が増えてしまった。ザルを洗うのはとても面倒くさいのだ。また、ベーコンとか炒めて入れると凄く美味しくなることも学んでしまう。当然、高校生の私は親に「肉ば入れてー」と要求する。佐賀の肉屋にはチャーシューが売っていなかったので、ベーコンで代用していたのだが、これはこれで味わい深く、特に豚骨スープと炒めて少し焦がしたベーコンの相性はかなりのものなのだ。チャーシューもモモ肉のチャーシューよりバラ肉のチャーシューの方が好きなので、単なるバラ肉好きの疑いもあるが、豚の角煮入りのラーメンよりベーコン入りの方が好きなのだから、そこはベーコンから出る出汁と豚骨スープとの相性が良かったのだと言うことにしておきたい。もっとも、ベーコンの話を始めると、この雑誌一冊でも足りないかもしれないくらい語り始める私なので、ここでは、このあたりで留めておきたい。

そうやって、インスタントラーメンに馴染んできた私は、大学に入り、東京で一人暮らしをするようになって愕然とする。気軽に、今日の晩飯はインスタントラーメンにしよう、と思い、しかしチャーシューもベーコンも良いモノが無かったから、豚バラ肉を醤油で炒めて擬似チャーシューを作って、焼く時に出た脂ごと、佐賀から送ってもらった「うまかっちゃん」にぶち込んで食べたのだった。それはそれは美味しくて幸せだったのだが、食べ終った流し台を見て驚いた。どんぶり、鍋、俎板、包丁、フライパン、ザルと、洗い物が山盛りなのだ。一人の夕食、しかもインスタントラーメンなのに、その洗い物の量は異常だ。彼女を呼んで、ちょっと凝ったパスタとか作らない限り、こんな量の洗い物は出ない。一人で、インスタントラーメンで、この量は、なんというか、コストパフォーマンスじゃないが、労力と味が見合わない。いや、とても美味いのである、美味いのであるが、彼女に出せるメニューではない。友達に出すのも憚られるジャンクっぷりである。当時、コンビーフとタマネギを炒めてパンに載せて食うというジャンキーなサンドイッチに凝っていて、友人と一緒にうまいうまいと盛り上がっていたのだけど、それ以上にジャンクと言うか、私個人の好みが凝縮し過ぎていて、人前に晒すのが恥ずかしいのだ。

そうして、私はしばらくインスタントラーメンを食べなくなった。そして、東京の友人たちが勧める「豚骨ラーメンの美味しい店」が、どれもこれも口に合わず、ラーメンそのものからも離れてしまった。カップ麺でさえ、そばやうどんに走って、ラーメンは食べなくなった。唯一、ラーメンと謳っていない日清の「カップヌードル」のみを例外として。私が、ラーメンを食べるようになるのは、昭和が終わり、平成になり、ライターとして食えるようになってからだ。そして、その始まりは、近所の肉屋が美味いベーコンを扱うようになったこと。そして、うまい豚骨ラーメンのカップ麺がいくつか出てきたこと。オーブントースターでベーコンを焼き、カップ麺に突っ込むだけなら洗い物は箸だけだということに気がついたからだ。

（納富廉邦）

筆者プロフィール（notomi yasukuni）
昭和38年佐賀市生まれ。立教大学在学中よりフリーライターとして娯楽全般をフィールドに執筆、現在に至る。フリーライターズのリードギター担当。近著「40歳からのハローギター」（幻冬舎）よろしくお願いします。

忘れられない言葉

「よくやった、自愛せよ」

その言葉は答案用紙の左隅に赤いペンで書かれていた。それは高校三年生の最後の国語のテストだった。内容はその先生にしてはめずらしく漢字の読み書きだった。僕は97点をとった。漢字のテストで97点をとったぐらいで先生がわざわざ一筆書いてくれることは普通はないことだが、それには理由があった。

その前の年の夏休みのある日、僕は予備校の夏季講習に原付バイクで向かっていた。ちょっと急いでいた。渋滞する車の脇を走り抜けようとしたら、ガソリンスタンドに入るために右折しようとしたトラックが渋滞の切れ目から突然現れた。ほぼ正面衝突に近かった。気がついたらバイクと一緒に倒れていて、右足の太腿が「く」の字に曲がっていた。あとで聞いたのだが事故の直後に「ああ、大学がダメになる…」と僕は言っていたらしい。ガソリンスタンドのオヤジはそれを聞いて、大怪我しているのによくそんな言葉を吐く余裕があると感心していたらしい。しかしその時は足が曲がってしまっていることに驚いてはいたが、まだ痛みは感じなかった上に現実感も無かった。むしろ受験がもう終わりだという絶望感に支配されていた。しかし救急車で運ばれている途中から右足に次第に痛みが走り始め、病院に着いた時は激痛に変わり、もう絶望している余裕もなくなっていた。

救急車は近くの救急対応の病院に僕を運んだ。病院では翌日に手術をすると言う。もしかしたら多少左右で足の長さが変わってしまうかもしれないと言われた。その日の夜、隣のベッドにいた人からしきりにこの病院は良くないから転院した方が良いと言われ、その人も病院と揉めてはいるが転院すると言う。最初は個人的な意見だと思って聞いていたが、あまりにもその言い方が真剣だったせいで、僕の父親も心配になったらしく、学校の側で仕事の行き帰りでも寄れる病院にしたいという理由で病院側をなんとか説得し翌日転院することが決まった。転院した大学系列の大きな病院では全く治療方法が異なっていた。そのおかげで約半年後、左右の足の長さは変わることなく、普通に歩けるまでに完治した。

手術後3ヶ月間の長い入院生活が始まった。当時学校では当然バイクは禁止だった。僕の事故はすぐに学校中に知れ渡り、担任をはじめ校長先生まで見舞いに来ることになった。入院したのは整形外科の大部屋だったので、スポーツで骨折した人が何人かいた。その中に僕の高校のラグビー部のOBがいた。OBの練習試合中に骨折したらしい。当然のように時々会話するようになった。ある日、そのOBのところに僕たちの学年の国語の担任であったI先生が突然見舞いに来た。なぜならI先生はラグビー部の顧問でもあったからだ。I先生はそのOBとベッドの脇で談笑していたが、僕はとても緊張していた。僕が同室にいることを当然彼から聞くと思ったからだった。しかし緊張していた本当の理由はそのことではなく、僕がその先生のことを一番尊敬していたからだった。当時は私学の男子校だったせいで、殴る蹴るの体罰は当たり前だった。しかしその先生が生徒に体罰を加えたことは少なくとも僕は1回も見たことがなかった。それでも、その先生には近寄りがたい強い男のオーラを感じた。その強さは決して肉体的な強さだけではなかった。その授業内容も高校の国語の授業の質を越えていたと思う。この先生の授業中は居眠りする生徒はほとんどいなかったと思うくらい緊張感があった。誰からも一目を置かれていた。その眼光は鋭く、そしてやさしく、授業をしているその姿は凛としていた。

I先生はOBの見舞いを終えて病室を出る直前に僕に向かって「元気か、頑張れよ」と笑顔で一言声をかけてくれた。僕は理系だったせいで、I先生とは国語の授業を受けるだけの関係だったので、その時まで僕の名前すら知らなかったと思う。でもたった一言、声をかけてくれたことがとてもうれしかった。

退院すると松葉杖をつきながらの通学が始まった。担任の先生は数学だったが、理系のくせに数学が苦手だったので、その先生からは見放されていたように思う。彼から「あと1週間休んだら卒業出来ないからな」とみんなの前で言われた。さんざん迷惑をかけたのだから返す言葉もなかったが。

年が明けて高校最後の期末試験の時がきた。案の定数学のテスト結果はクラスで最下位だった。その他の科目も3ヶ月のブランクは大きく、散々な結果だった。しかし国語のテスト内容はI先生から漢字の読み書きと言われていた。いつものテストでは文章を書かせることが多かったがなぜかその時はめずらしく漢字の読み書きだけのシンプルなテストだった。テストの趣旨はこのくらいの漢字は高校を卒業する時に、書けるそして読めるようにしておけということだったような気がする。漢字の読み書きであれば頑張れば出来ると思った。そして、病院で一声かけてくれた恩義を高校最後のテストで返したいと思った。僕は他の科目に中途半端に力を分散させてもたかが知れていると思い、国語のテストだけでもいい点数を取って締めくくりたかった。

後日答案用紙が戻ってきて前述の赤いペンで書かれた短い言葉を読んだ時、僕は涙が出そうになった。当時は先生が覚えていてくれたことだけでもうれしかったが、今思えばたった10文字にも満たない短い言葉にこんなにも心を動かされたことはない。勿論この言葉自体にそれ以上の意味はないが、言葉の簡潔さの裏に流れる文脈にI先生の深いやさしさを感じたのである。

卒業してからしばらくして僕たちの母校が荒廃しつつある噂を耳にした。その後何年かしてI先生が校長になったことをホームページで知った。きっと良くなると思ったが、予想通りその後何年かすると見事に立ち直っていた。さらにI先生は校長引退後も学園長・同窓会長として在任を続け、同窓会のホームページでは毎年I先生が卒業生を送り出す文章を書いていたが、その内容は教師という枠を越え、ひとりの人間としての思いが綴られていた。その文章はその眼と同様、いつも厳しさとやさしさに満ちており、同時に男の美学すら感じさせた。

昨年の3月、ふと思い立って久しぶりに同窓会のホームページをのぞいてみた。I先生はすでにその職を引退されていたので新たな文章に出会えるわけではなかったが、そこで目にしたのはI先生の訃報とそれに伴なったお別れ会が数日前に行われたという記事だった。お別れ会に出席できなかったが、ただ生きている間に、I先生が答案に書いてくれた短い言葉のお礼を直接会って伝えたかったと思った。担任でもなく、ちゃんと話したこともなかった現代国語を担当してくれた一教師ではあったが、僕の中では今でも師と呼ぶにふさわしい数少ない恩師であり続けている。

（島 隆志）

筆者プロフィール（shima takashi）
昭和30年、横浜生まれ。（半分父方の沖縄の血が入っている）島製作所代表。広告、出版、音楽関係のカメラマン・グラフィックデザイナー。その経験を生かして本誌を発行し編集長を務める。

バード電子のバードはチャーリーパーカーのニックネームだった

その6

幻の四重奏団

2017年の年末に高柳さんの書斎を整理する事になり、私塾の生徒であったギタリストの今井和雄さんと廣木光一さんと手分けしてお手伝いさせて頂きました。書斎は1991年に高柳氏が他界されてからずっとそのままに保存されており最後に入院のために家を出た時のままでした。8畳程の書斎の様子ですが、入って右手にデスクがありデスクの前の壁一面がLPとオーディオが収まる自作のラックになっていました。オープンリールデッキ2台と力セットデッキ2台はセレクターを使い自由にダビングできるよう配線されておりラックには2組4個のスピーカーが収納されています。デスクの右手にはスチール本棚がありオープンリールテープが300本以上がきれいに収まっています。入っての左側の壁には背の高い本棚があり、さらに奥の壁面も一面が本棚となっています。収納しきれない本は本棚の上に増設された箱にぎっしり詰まっておりますので書斎の壁は4面のうち3面は壁板が見えない状態です。残る1面には出窓があり、出窓には録音済みのカセットテープ数百本を収めた収納ボックスが積み重ねられており出窓の手前にはソファーが置かれ、そのソファーでギターの練習をされていたようです。

高柳がギター(音楽)を教えていた私塾にはこの書斎で授業を行う組『煉塾』と都内の貸スタジオで習うスタジオ組がありました。(『煉塾』は1968年より。スタジオ組は80年代より開校)。今回、私と一緒に整理を行った二人は1970年代から『煉塾』に通った生徒ですからこの書斎は通い慣れた場所だっと思います。もう一人『煉塾』の生徒で飲食店を経営する池田氏が引越を全面的にバックアップしてくれました。実は、今井和雄は高柳の塾を卒業した唯一の生徒であり、廣木光一はほとんどのレッスンをクリアしながらもあえて課題を残し続けた留年生であります。つまり二人は高柳のギタースクールの中で最も長い期間、教わってきた生徒となります。高柳の私塾は、1968年から亡くなられるまで23年間続けられておりますので、通った生徒は沢山おりました。私塾にはジャズギタリストの渡辺 香津美やロックギタリストの山本 恭司も通われていたようです。

高柳のこの世に残していった物をバラバラと分散させずに守り続けたのは奥様でした。相当の苦労があったと思います。今回それを整理する事になった理由は、ビルの老朽化等に伴う大幅な改装の話であったり、東日本大震災の時に棚が落ちレコードが崩れてしまった等々、様々な条件が重なってからであり他に選択肢がなかったわけです。奥様にとってはとても辛い決断だっとは思いますが、結果的には限られた条件の中で最良の方法を取れたとは思っております。書籍は廣木さんが定期的にライブを行っているライブハウス『COOL JOJO』に保管、譜面は今井さん、LPとテープは私が保管する事になりました。ギターは、今井和雄、廣木光一、大友良英に譲渡され二本は信頼できる(手放さないと思われる)古い友人の元に行きました。

ラックの整理には苦労しました。ラックに乗った全ての小物を取り出した後でオーディオを取り出しました。オーディオは複雑に接続されており端子から出たケーブルがラックに固定され絡まりあっており少しでも傾斜させるとケーブルに引っぱられラックが倒れてきます。ラックを抑えながら、プラグを抜きます。今でこそ笑っていられますが、その時は真剣です。ケーブルの塊とラックと棚板が自分側に倒れて来た時はさすがに慌てました。

ケーブルを外し終わりホッとした時に大発見がありました。棚板の下、デスクの裏面に隠れるようにして小箱があり、箱の中から古いオープンリールテープが出てきました。相当古い物でした。1950年～60年代のテープでした。たぶんこの住宅に引っ越されてから一度も手をつけられていないと思われます。棚を全て崩さなければたどり着けない場所にあったのですから本人もここにテープがある事は忘れていたのだと思われます。

撮影：筆者

19歳でプロデビューした高柳昌行は、1957年には当時は権威があったジャズ雑誌スイングジャーナル誌で日本のジャズギターリスト人気投票で1位となり天才ギタリストとして評価されておりました。その後、人気絶頂の1963年頃に不幸な事件が起きました。麻薬所持で逮捕され1年間服役となったのです。すこしブランクがあり活動を再開した時には、新メンバーを集めボサノヴァグループを始めたと記録があります。このグループの情報は少ないのですが、オーソドックスなジャズも演奏できる編成であったので営業的な仕事も入れやすかった思います。OYAzin読者ならご存知かと思いますが1960年代の終わりごろに大橋巨泉の『11PM』という番組がありましたね。11PMにも何度か出演された記録があります。(録画を探してます。TV関係者の方、是非ご協力お願いします)

高柳の活動史を調べていると1966年頃までボサノヴァグループで活動する…その次の記録が1969年9月衝撃的な前衛的音楽をレコーディング『インディペンデンス』(テイチクレコード)になっており3年間が飛んでおりました。1970年からは多くの記録が残っております。記録だけから判断するとボサノヴァからいきなり前衛音楽となります。私はボサノヴァグループとは言ってもギター・バイブ・ベース・ドラムの構成ですので、ジャズクラブで演奏する時はジャズを演奏されたいたのだろう。と考えておりました。が、ではそれは一体どんなジャズだったのだろう?録音は存在しないのだろうか?あるとすれば何処にあるのだろうか?まだカセットテープの無い時代、オープンリールデッキで自ら録音する事があったのだろうか?とこの点がずっと気になったおりました。

小箱の中のオープンリールテープを見ると1950年代のライブ録音の他に60年代の録音テープが一本だけありました。1969年2月高柳ジャズコンテンポラリー4!『インディペンデンス』の7ヶ月前の録音、しかもメンバーはボサノヴァグループと同じ!

「幻のグループ 高柳ジャズコンテンポラリー4」ここにあったんだ!

テープのケースの中に1969年に書かれたメモがあり、録音日と曲名がわかりました。そして何故かメモには書き加えがありました。

1974年現　5年前　36歳

このメモから想像すると、「1974年に5年前の1969年の演奏を聴き返した。」という事になります。この書き加えた内容はどんな意味があるのかはわかりません。でも高柳昌行の空白の3年間が明らかになりました、この時期の高柳はモードジャズを、MILES DAVISのESPやジム ホールのケアフルを演奏していた。そしてガボール ザボのようにフィードバックしていたんだ…とにかくありえない発見となりました。

私は感動のあまり、発見したテープをすぐにCD化することにしました。

(斉藤 安則)

筆者プロフィール(saito yasunori)
昭和35年、北海道生まれ。株式会社バード電子代表取締役。23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白、2年間ライブに同行し、記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳昌行専門のレーベルJINYADISCを運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

『NOT BLUES』高柳コンテンポラリー4
JINYADISC B-31
2018年10月10日発売

1. ノット ブルース　高柳 昌行（ギター）
2.ESP　三戸部 章（バイブ）
3. 枯葉　萩原 栄治郎（ベース）
4. あなたは恋を知らない　岸田 恵二（ドラムス）
5. ケアフル　（1969 年 2 月 東京）

NOT BLUES
Takayanagi jazz contenmporary 4
JINYA DISC B-31
¥2,400（税別）
■B-Shop（バード電子オンライン）amazon
ディスクユニオン各店

fなグラビア 律儀な脚線美

●DVDのキャプチャー画面を掲載する予定でしたが、松竹に確認したところ任意に切り取られた静止画は商業誌でなくても掲載は不可とのことで、私が撮影した昭和な脚線美で代用させていただきました。

先日小津安二郎の「秋刀魚の味」と「秋日和」という映画を観た。前者が妻に先立たれた初老の父親（笠智衆）と娘（岩下志麻）との関係、後者はその逆で未亡人の母親（原節子）と娘（司葉子）との関係をテーマに据えた映画だった。共に小津監督の得意とする家族をテーマにしたシリーズの中の2本である。

小津安二郎の映画はシーンの合間に挿入される風景のカットも興味深い。まるでスチール写真のような計算されたフレーミング。小津監督は俳優にも構図が壊れるからという理由で、余計な演技は一切許さなかったらしい。それくらいに構図にこだわった監督だったからさりげなく見えるが実は意味がある（と思う）風景カットも印象深いのかもしれない。そして映画全体からは、敗戦後アメリカ文化に影響されながらも、まだ昭和の日本人独特の律儀さと共におおらかさも随所に感じる。今見ると当時の日本は経済的には途上状態であったのだろうが、映画とは言え、登場する人物には今よりも気品を感じる。しかし、小津映画は地味であり、この映画が海外で評価される理由はその地味さゆえかもしれないとも思う。小津映画の多くは大きなドラマもなく、映画特有の大袈裟な感情表現も少ない。淡々とした日々の中での人々の微妙な心理をさらっと表現している。クールと思える時すらある。しかしそれ故に見終わった後に小津映画独特の余韻が残るのも確かである。

●小津映画をちょっと意識した平成に撮影した昭和な脚線美。もっと引かなくてはいけなかった。

小津映画は独特なローアングルでも有名である。脚フェチとしたら、固定されたローアングルの画面に入って来る女性の足元がなんとも気になる。今回観た2本ではオフィスシーンが何回か出てくるが、やはりローアングルでオフィスの女性の足元を含む全身のカットを映している。当時のOLはハイヒールのパンプスを履いていることが多く、さらにその歩き方には律儀で上品な美しさがあった。脚フェチには興味深いシーンである。これ見よがしに脚を露出したシーンよりもこういった何気なく脚が登場する方が好みである。小津監督は実は脚フェチなのではないかと思ってしまうくらいにローアングルが多いが、それは抑制された表現を好む小津監督ならではの映像手法のひとつであり、脚フェチは副産物としてそのシーンを楽しませてもらっているわけである。（島）